

ただ闇が広がるだけの世界に、一人ポツンと佇んでいた。

ここは死の世界なのかと錯覚するほどの深い深い闇と静寂に、足が竦み体が震えてくる。

ディーノはかぶりを振ると、恐怖を振り払うかのようにその場を駆け出した。

走っても走っても、続くのは闇ばかり。

どこに向かっているのかも分からない。

それでも全身が恐怖に支配されないように、ディーノはただ走り続けた。

「ロマーリオ……」

終わりのない闇の中、負けそうになる心を支えるように愛しい人の顔が脳裏に浮かぶ。

「ロマーリオ、どこ？ どこにいるの？」

辛い時、悲しい時、いつも傍に居て支えてくれたロマーリオ。

自分にとってなくてはならない大切な存在の彼の名を呼びながら、闇の中を駆け出した。

どれくらい走り続けているのだろうか。

息が切れ声も掠れ、それでも心の中でロマーリオの

名を呼び続け、疲労で徐々に重くなってくる足を無理矢理一歩、また一歩と前に進める。

「!?」

これ以上は限界と立ち止まろうとしたその時、聞きかなかった眼前にゆらりと人影が浮かんだ。

「誰？」

立ち止まってゼエゼエと肩で息をしながら、目を凝らして前方の人影を見違える。

人影は徐々にはっきりとしてきて、その姿をディーノの前に現した。

「ロマーリオ！」

ずっと探し求めていた愛しい人の姿を見つけ、ディーノは歓喜の声を上げる。

疲れも吹っ飛んで、ロマーリオの元へ再び駆け出した。

「よかった……やっと見つけた。ロマーリオがいなくて、不安で……」

ロマーリオの近くまで来ると走るのを止め、目につすらと涙を滲ませながら、大好きな温かくて大きな手に自分の手を伸ばす。

だがロマーリオはディーノに気付いていないのか、